現代宗教研究セミナー

アラブ宗教事情

――その原点を探る――

湯田　豊
（神奈川大学教授）

はじめに

私の立場

お話をさせていただく前に一言、二言お断りをさせていただきます。

まず第一に、私はイスラームの専門家ではありません。あくまでも宗教学の枠の中でアラブの宗教、イスラームについてお話をさせていただきたいと思っております。

第二に、私はどちらかというとイスラームよりはユダヤ教に近い立場です。私は名前が湯田と申します。よく学生からユダヤじゃないかと冗談を言われることがあります。ユダヤ人ではありませんが、立場から申しますと私はユダヤ教に近いわけです。

第三に、私はキリスト教に対して批判的でありまして、来月、ニーチェの『反キリスト』という翻訳に解説を添えて出版します。

やはり人間は自分の立場をあらかじめ明らかにしておく必要がありますので、最初から誤解のないように、私はどちらかというと旧約聖書ないしモーセに極めて同情的であることを申し上げておきます。

ヨーロッパの宗教で申しますとユダヤ教、キリスト教、それからイスラーム教の三つは非常に密接な関係があり、切り離すことはできません。しかし、今日、ここで「アラブ宗教事情――その原点を探る――」というテーマを与えていただきましたので、私は焦点をアラブに絞りましてお話をさせていただきたいと思っております。

アラブ人のアイデンティテー

一体アラブとは何か。つまり、アラブであることの存在証明、今はやりの言葉で申しますと、アラブのアイデンティティーが問題なのです。

実を申しますと、アラブというのはセム民族の一種ですが、私たちはセム人にはあまり好感を持ちません。セムといいますと何か爬虫類を思い出すような印象を与えられます。インド・ゲルマン、あるいはインド・ヨーロッパに我々は同情的であり、セム的なものに対しましては好感を持っていなかったというふうに言えると思います。

アラブはセムの一種です。恐らく正確にはシェムと言うべきですが、アラブはシェムの後裔とお考えいただければいいと思います。

旧約聖書の創世記の第五章三十二節に、「ノアの箱舟」で有名なノアが五百歳になったときに――旧約聖書の年齢は全く信用できないのですが――彼はセム、ハム、ヤベケの父になったと記されております。

セム人とか、ハム人というのは言語学的にもよく知られていますが、セムはノアの子孫です。アラブ人は、このセムを祖先にしています。ところが、ノアはあくまでもユダヤ人の家長でありますので、セムはアラブだけではなくて、ヘブライ人もまたセムの子孫だということになります。今、アラブとヘブライは、ご承知のように、大変憎しみ合っていますが、実を言うと彼らは血を分けた兄弟であります。近親憎悪が支配的なのです。人間の憎しみの中で一番深

いのは近親憎悪だと思います。

セムの代表的なのはアラブ人であると同時に、ヘブライ人です。しかもセムの後裔であるセム人とヘブライ人は、アラビア半島という同じところに住んでいて、歴史的に大変深刻な状況に置かれております。

さて、そこでアラブのほうに話を移させていただきますが、アラブとは何かと申しますと、アラビア半島に起源を有するセム人の一種であるということです。しかし、ユダヤ人もこれまでアラビア半島の外れのほうにあるパレスチナに定住してきましたので、アラブとヘブライは血を分けた兄弟ですが、それだけに憎しみが深いのですね……。

私に与えられたテーマは「アラブ宗教事情」でありますので、どうしてもこれにこだわりますが、まず最初に、アラブとは何かという問題に入らせていただきます。

歴史的な経緯がありますが、何と申しましてもアラブが世界史的に認知されるのはムハンマド――私の本ではマホメットとしてありますが、最近ではムハンマドと言っているようで、特にアラビア語をやっている方、イスラームをやっている方ほとんど全部と言ってもいいのですが、ムハンマドと発音しますので、私もこれからはそれに従います。

そうなりますと、一体アラブとは何かということになります。アラブというのは要するに、ムスリム（モスレム）ということです。では、ムスリムとは何か。一口で申しますと、ムハンマドによって広められた宗教で、皆様ご承知のイスラーム――これはイスラムとも言いますが、どちらでも構いません。専門の学者でも、人によってはイスラーム、あるいはイスラムと言っています。私はイスラームと言うようにしております。このイスラームという宗教の神聖な物語、もしくはムハンマドの物語の中に自己の存在証明を見出そうとするのがアラブ人なのです。

日本で言うと、よかれあしかれ天皇を抜きにしては日本の物語を考えることはできませんが、アラブの場合にはムハンマドがすべてでありますから、ムハンマドの物語をおのれ自身の物語というふうに置きかえて、ムハンマドの物語はすなわち私の生と死にかかわる重大事であるということを身をもって感じる人、そういう人間がまさにムスリム

であり、アラブであると考えることができると思います。

アラブの宗教事情

ここでアラブの宗教事情に少しこだわってみたいのですが、日本ではイスラームという宗教は比較的研究されていません。どちらかと言えば、日本では仏教とキリスト教の研究が盛んに行われております。しかし、非常に乱暴な言い方をしますと、世界の人口の七人に一人はムスリムとかモスレムと言われる人々なのです。

私は実は去年の十一月にインドネシアから来たムスリムの青年十五、六名を前に、三時間ほど講演をいたしました。一時間半ほどは日本語で、あとの一時間半はインドネシアの青年が通訳してくれましたから、講演時間は全部で三時間になりましたが、そんなわけで私もムスリムに個人的に接触したことがあるし、これからも恐らく接触するでしょう。ムスリムの数は七人に一人ですから大変大きいのです。キリスト教徒は三人に一人くらい、いや、世界のクリスチャンはそんなにいないのでしょうが、乱暴な言い方をすれば、それくらいいると思います。

とにかく七人に一人はイスラームですから、この現実を無視することは許されません。しかも、キリスト教、仏教はそれほど急速に世界に広まっているとは思われませんが、イスラームの場合、目をみはると申しますか、非常に急速に広まっています。驚くべきことです。

例えば、どういう勢力圏があるかと申しますと、アト・ランダムに調べてみましたが、中東はもちろん本拠地になりますが、アルジェリア、エジプト、イラク、イラン、ヨルダン、レバノン、リビア、モロッコ、シリア、イエメン、サウジアラビア、クウェート、この辺が何と申しましてもイスラームの代表的な国々で、それ以外にも北アフリカはほとんど全部、それから、パキスタン、バングラデシュ、マレーシア、インドネシア、フィリピン――フィリピンにはキリスト教もありますが、東南アジアにおいてもイスラームは非常に根強いわけです。さらにイスラームは、中国、ソ連、イギリス、アメリカと、ほとんど世界中に広がっておりまして、私はこの前、ある中国人の学者の講演を聞き

そこねましたが、回教と称するイスラーム教徒が中国にたくさんいるそうですね。ソ連にもイスラーム教徒は多いですね。ですから、今申しましたように、世界のムスリムを考える場合、七人に一人はイスラームです。私たちはそういう人々の生きている信仰を完全に無視することは許されないだろうと思います。

イスラームのルーツ――アブラハム及びイシュマエルの物語――

イスラームのルーツについて、世間ではあまり言われていないことをここで少しご紹介させていただきたいと思います。

一番最初のイスラーム教徒は、何とアブラハムです。ちょっと考えると奇妙ではありませんか。アブラハムというのは最初のユダヤ教徒でありまして、旧約聖書で一番活躍するのはモーセであります。モーセの次に活躍するのがこのアブラハムと、その奥様のサラです。最初のユダヤ教徒であるアブラハムが何とイスラームにおいては最初のイスラーム教徒なんです。これはまことに注目すべき現象ではないかと思います。

アブラハムはアラブの世界におきましては、アラビア語で表現されます。発音がイブラーヒムと変わります。しかし、ここではアブラハムと言ったほうがよろしいかと思います。

旧約聖書のアブラハムにはイサクという一人息子がおります。アブラハムとイサクの物語は大変有名であります。簡単に申し上げますと、神（ヤハウェ）がアブラハムに対して、彼の一人息子を犠牲として捧げなさい、薪の上にイサクを乗せて焼き殺せと命じます。それに対してアブラハムは神の命令に従って息子を焼き殺そうとするけれども、最後に神が介入してイサクは助かるというのがこの物語であります。

この物語は我が人類の愛のルーツであると思います。これは父と息子の物語で、お母様や娘は登場しないのです。私がちょっと法華経を調べたところ、同じなんですね。法華経のどこを読んでも父である釈迦牟尼仏が息子を愛するというのが法華経の主要なテーマです。法華経においては父に愛されるのは「子供」ですけれども、「子供」の原語

はプトラーハですから、子供とは実際には息子のことなのです。これはアブラハムの物語と奇妙に一致します。

私が申し上げたいことは、アブラハムとイサクの物語がイスラームの場合にはちょっと変わっています。アラブの世界ではアブラハムはユダヤ人ではないのです。ユダヤ教とかキリスト教が存在する以前には、純粋のイスラームとしてのアブラハムが登場する。そして、イサクというのは実は第一夫人のサラの息子ですが、これがイスラームになりますとイシュマエルというイサクの異母兄が脚光を浴びます。サラは長い間妊娠しなかったものですから、アブラハムが側女のエジプト女のハガルに産ませた子供として登場します。アラビア語ではイスマイルと発音が変わってきますが、とにかくイシュマエルが長男なのです。旧約聖書では母のハガルと彼女の息子のイシュマエルは正室のサラのジェラシーによって追放されてしまいます。

アブラハムとイシュマエルの二人が聖地メッカにやってきて壁に囲まれた黒石が置かれているカーバ神殿をつくったということです。神は一人息子のイシュマエルを神に捧げろと命じ、アブラハムはそうしようとしますが、最後に天使があらわれて、彼のかわりに子羊を捧げればいいということになり、結局、イシュマエルは助かります。

要するに、神の意思に絶対服従するというのがイスラームですから、アブラハムとイシュマエルの物語におきましては、ハガルの息子のイシュマエルが一番最初のイスラームであるということになります。

ただ、イスラームにしましても、ユダヤ教にしましてもおもしろいのでありまして、最後に一人息子は命を救われるのですが、一人息子を救わないで焼き殺した非人道的な宗教があります。それがキリスト教です。ユダヤ教の場合とかイスラームの場合には、羊をかわりに捧げるわけですけれども、キリスト教の場合にはイエス（神の一人息子）を桀（はりつけ）にして殺してしまいました。

神の意思に絶対服従するというのが、イスラームです。ムスリムとかモスレムというのは「服従する人」というくらいの意味であります。

要するに、イスラームのルーツはアブラハムとイシュマエルの物語であるということです。これは世間ではそれほど知られておりませんので、ご紹介させていただいた次第です。

一、ムハンマドの物語

ハデージャとの結婚

ムハンマドの物語が、何と申しましてもイスラームのハイライトです。すべてと言ってもいいくらい大変重要なテーマでありますので、ムハンマドの物語について少しばかりお話をさせていただきたいと思います。

ムハンマドという人は非常に魅力的な人です。生まれたのは西暦紀元で申しますと五七〇年、死んだのは六三二年と言われ、これはほぼ間違いないと思います。信用していただいてよろしいかと思います。彼は七世紀の人間です。

この人は一人息子です。彼は幼くして両親を失いました。大変かわいそうな人です。お父様はお母様が妊娠中もしくは出産直後に死んでしまいました。お母様は大変貧乏に苦しみながら、ムハンマドが五歳のときに死んでしまいます。ですから、彼は幼くして天涯の孤児になりました。この体験がイスラームをつくる上で実に巨大な影響を与えます。幼くして両親を失うということが幼児にとって一体何を意味するかということは、何も精神分析学者のフロイトを待つまでもありません。両親の死は人間共通の深い悲しみであります。

祖父はムハンマドが八歳のときに死にます。それからは伯父様のアブー・タリブという大変立派な方がムハンマドを引き取りまして、大きくなるまで育ててあげます。ハシム族の長であったこのアブー・タリブには息子がいて、この息子とムハンマドは切っても切れない関係になり、両人の関係がイスラームの歴史に物凄い影響を与えます。

さて、ムハンマドは二十五歳で結婚します。ムハンマドは学校へ行っていなくて、教育を受けていません。文盲です。両親がいなくて貧しかったから、キャラバンの会社に勤めます。経営者が大富豪のハデージャという未亡人です。

この方は非常に聡明な女性です。ムハンマドより十五歳年上の四十歳ですが、二人は結婚します。

この結婚はムハンマドにとって非常によかったわけです。彼はこれで生活が安定しまして、教育を受けることもできました。ハデージャは四十歳で結婚し、子供を六人も産みます。娘さんが四人、息子さんが二人です。しかし、一人の娘さんを除いて全部若くして死にますから、ムハンマドにはたった一人のお嬢さんしか残らなかったのです。

ムハンマドは人間として非常に立派で、金持ちの未亡人と結婚しましたが、病人の世話をしたり、財政的に弱い人々を虐げることに対して抵抗したりします。人間はみんな平等だということを信じ、彼はメッカの社会において万人の権利を守るために一生懸命努力しています。ムハンマドはまことにもって愛すべき人です。彼は「信頼されている人」として知られるようになりました。彼は正直で、道徳的、そして賢明でありました。

ヒラー山における神の啓示

ムハンマドはメッカという町の生まれですが、彼が四十歳になったとき、突如として騒がしい生活から離れて、近くのヒラー山の洞窟にこもって瞑想にふけるわけです。ここで天使ガブリエル――アラビア語ですとジブリールと言いますが、私はガブリエルでなじんでいますから、ガブリエルと言わせていただきたいと思いますが――を通してムハンマドは神の啓示に接します。

神のことをアラビア語ではアッラーと言います。昔はアラーと言いましたけれども、最近はアッラーと申します。これは固有名詞ではなくて、神そのものを意味します。

ムハンマドは神から霊感を吹き込まれて、クルアーン（コーラン）を暗記します。コーランの二十六章の百九十五に、明瞭なアラビア語で神が語ったとあります。もっともアラビア語でなければムハンマドは理解できなかったでしょうけれども……。それをガブリエルが読めと言うのです。アラビア語で「読む」ことをクルアーン（コーラン）と言います。ムハンマドは暗記したコーランを音吐朗々と読みます。このことは、コーランの九十六章の一から五に

あります。

ちなみに、コーランは全部で百十四章から成っております。チャプターのことをアラビア語でスーラと言います。私たちはスートラのことをお経と言います。サンスクリットの「スートラ」はお経であって、チャプターではありませんが、大変近い言葉ではないかと思います。スーラというのはチャプターで、第一章、第二章というような構成になっています。

最初に神の啓示を受けたのが四十歳で、六十二歳で死ぬまでの二十年以上にわたって、彼にずうっと神の啓示が授けられるということになったわけであります。

ここにいらっしゃる方は聖職者の方が多いと思いますので、特に申し上げたいのです。ムハンマドがヒラー山で天使ガブリエルを通じてアッラーから啓示を受けたということですが、皆さんいかがでしょうか、このことをだれが信じましょうか。彼は少しおかしいのじゃないかと人々は考えたのではないかと思います。ムハンマドはメッカの出身でありまして、クライシュ族という部族に属していますが、主にクライシュ族の人々に熱っぽく語りかけましたが、だれ一人耳を傾けてくれません。

ところが、すばらしいことが起きました。それは十五歳年上の奥様、ハデージャが一番最初に夫の言葉をアッラーのメッセージとして受けたのです。この女性は本当にすばらしい人間ですね。間もなく彼の親友であるアブー・バクル、それから、先ほどムハンマドは伯父様のアブー・タリブの家に世話になったと申しましたが、その伯父様の息子でムハンマドにとって従兄であるアリー、さらにムハンマドが解放した奴隷がムハンマドの言葉を心から信じたのであります。

一番最初、奥さんと親友、従兄、解放してあげた奴隷の四人がムハンマドの言ったことを信じることによって、イスラームという世界宗教が出来上がったのでありますから、精神の力の巨大さをこれほど深く感じたことはございま

せん。恐らく日蓮聖人も一人では日蓮宗をつくれなかったので、どなたか御聖人の近くにおったのではないでしょうか……。

いずれにしましても、たった四人が信じることによってイスラームが成立したわけです。最初の三年間は信者は四十人しかいなかったそうです。もちろん、メッカの方々です。その大部分は若者であったと言われます。それから、ムハンマドを最大の預言者として受け入れたのは、おもしろいことにムハンマドの種族以外の人たちでした。この世界の巨大宗教が四人の信仰から始まって、最初の三年間は四十人であったというこの事実は、今後の仏教ないし日蓮宗の布教に示唆するところが少なくないと思いますが、いかがでしょうか。

メッカからメディナへの移住

西暦六一九年に愛する妻のハデージャが死にます。その直後に伯父のアブー・タリブが死にます。ムハンマドは一番信頼し愛していたかけがえのない二人の支持者を相次いで失ったのです。アブー・タリブを失ったということは、ムハンマドにとりまして大変な痛手になります。

これは宗教学の本には書いてありませんが、一体どういうことかと申しますと、ムハンマドはクライシュ族の出身で、名門ハーシム家の御曹子ですが、伯父様がハーシム家の当主でありまして、ムハンマドを保護してあげたわけです。ハーシム家の当主たる者は自分の種族の人間をあらゆる迫害から守らなければならないという不文律があります。ですから、ムハンマドはクライシュの人から迫害され始めましたが、伯父様は身を挺してムハンマドを守ってあげ、そのためにムハンマドはメッカにとどまって布教することができたのですが、不幸にして愛する伯父が死んでしまったのです。ただ、タリブは終生ムスリムになることはありませんでした。要するに、ハーシム家の当主としてムハンマドを保護したのであって、タリブはイスラームの信仰は持っておりませんでした。

タリブ伯父様が死に、ムハンマドのもう一人の別の伯父様がハーシム家の跡を取ります。この伯父様はムハンマド

を好きではないのです。何とかしてムハンマドの保護をやめ、厄介払いをしたいと思っていた。そこで、この人は汚い手を使いました。この伯父様はムハンマドを呼んで、

「タリブ伯父はムスリムではなかった。死んでしまったから、彼はもう救われないのではないか。彼は地獄に落ちたのではないか」

と言います。それに対して正直なムハンマドは、

「そうです。我が愛するタリブ伯父様は信仰心がなかったから、地獄に落ちて呪いを受けています」

と答えます。

それを聞いて伯父様は喜んで、

「おまえはハーシム家の先代の当主を侮辱した」

と言って、ムハンマドを保護することをやめます。

愛する奥様とタリブを失い、次の伯父の保護を失ったムハンマドはメッカにおれなくなり、二百マイルほど離れている近くの町のメディナへ移るわけです。

これより先、西暦六二〇年、メッカのカーバ神殿へ巡礼するのが昔からのならわしなので、六人のメディナの人々がメッカでムハンマドと出会い、ムハンマドの人格並びに神のメッセージに打たれて、彼に協力を約束します。そして、ムハンマドの信頼しているムスリムの一人とともにメディナに帰り、今度はメディナの代表者がメッカでムハンマドと秘密のうちに会い、そこで両者の間に協定が成立し、ムハンマドはメディナへ逃れることになります。大量に異動すると目立ちますから、六二〇年七月からメッカのムスリムは少人数ずつメディナに移ります。最初は七十余名の成人男子とその家族が移ります。

ここで私はおもしろいことに気がつくのです。ムハンマドは偉大であります。普通、日本の軍隊では将軍が真っ先

に逃げました。しかし、ムハンマドは自分が先にいなくなったら、残ったムスリムが迫害されて困るから、自分は最後の瞬間までメッカにとどまって敵の注意をそらして、ムスリムが全部安全に移ったのを見きわめてから、最後に友人のアブー・バクルとともにメッカを立ち去ります。これはちょっとできることではないと思います。私はムハンマドの勇気と申しますか、人間的な誠実さと申しますか、彼のこの行動に胸を打たれます。

ムハンマドはメッカからの脱出の途中、殺されかかりますが、三日間洞窟に隠れて難を逃れメディナへ着きます。この間、彼の従兄のアリーはメッカにあるムハンマドのベッドに横たわり、あたかもムハンマドがそこにいるかのように振舞い、後に無事脱出します。

六二二年九月二十四日、ムハンマドとアブー・バクルがメディナに到着したとき、多くのムスリムは声を上げて喜びました。この日がイスラーム暦の元年になります。これをハジュラ（移住）と申します。ここで初めてイスラームはいよいよ世界宗教としての基礎をつくるのであります。

愛妻アーイシャ

ムハンマドは最初の奥さんハデーシャを愛していたので、ほかに妻を持ちませんでしたが、ハデーシャが死んだ直後にある女性と婚約します。その女性はイスラーム史に残る絶世の美女と言われているアーイシャといって、親友アブー・バクルの愛娘です。彼はこの女性と結婚します。

ムハンマドの歴史的使命

ムハンマドがアッラーの啓示を受けたのが西暦六一〇年、死んだのは六三二年ですから、この間、二十数年しかありません。この期間にムハンマドはイスラームの次のような目標をほぼ達成したと言えます。

第一の目標は、共通の信仰に基づく共同体（ウンマ）の建設です。つまり、メディナにおいて、メッカからの移住者と、ムハンマド及びメッカからの移住者を助けた人たちの二つの共同体が合体して、イスラームの信仰に基づいて

一つの運命共同体をつくったということ。

第二に、祈り、礼拝の形を確立したこと。

第三に、その共同体自身の政府、行政、裁判、経済及び軍事力を確立し、アラビアを完全に統一したことです。

それ以降、アラブは一つの大きな共同体として発展することになったわけです。

二、四人のカリフ

アブー・バクル、ウマル、ウスマーン及びアリー

ムハンマドが死ぬと後継者の問題が起こります。ムハンマドは神の使途で預言者ですから、これを後継することはできません。そこで、預言者としてのムハンマド以外の行政、裁判、軍事力についての代理人が必要です。ムハンマドの代理人はカリフと言われます。

カリフはたくさんおりますが、中でもイスラームにおいて正当に選ばれた四人のカリフがいます。このカリフの時代が西暦六三二年から六六一年まで続きます。この間にイスラームは宗教として完全に確立できたわけです。この期間は大変重要な時期ではないかと思います。

ただ、ここでお話しておきたいことは、初代のカリフのアブー・バクルのことです。彼はあまり人気はなかったので、選挙すれば恐らく落選したのでしょうが、彼はとにかくカリフになりました。すばらしい人で、ムハンマドの無二の親友が初代カリフになったことはイスラームにとって大変幸せでした。アブー・バクルのお嬢様がムハンマドの奥様になったアーイシャです。バクルはカリフになって二年後に死にます。

第二代のカリフはウマル（オマール）で在位十年間です。前半はよかったのですが、後半は悪政を敷いてクリスチャンの奴隷の短剣で暗殺されます。

第三代はウスマーン（オスマーン）で、西暦六四四年から六五六年まで在位します。この人はムハンマドと同じクライシュ族の出身ですが、ハーシムではなくて――後にウマイヤ王朝が築かれますが――ウマイヤ族の出身です。この人はどうしようもない身内びいきといいますか、縁故主義者でありました。この人も暗殺されます。

四代目がアリーです。これはムハンマドがお世話になった伯父アブー・タリブの息子ですから、ムハンマドの従兄であります。ムハンマドには先妻ハデージャとの間にお嬢さんが四人、息子さんが二人いますが、ファティーマというお嬢さん一人だけ残して、ほかはみんな若くして死んでしまいます。アリーはファティーマと結婚し、男の子を二人つくります。長男がハサン（ハッサン）、次男をフサインと言います。ですから、アリーはムハンマドとは非常に近い関係になります。このアリーも暗殺されます。

正当に選ばれた四人のカリフの中で天寿を全うしたのは初代のアブー・バクルだけで、ほかは全部暗殺されているわけです。ですから、イスラームの初期カリフの歴史は暗殺の歴史であり、ちょっと日本人には考えられません。

アリーの党派――シーア派の成立――

第四代カリフのアリーによれば、初代、二代、三代のカリフはムハンマドの財産を横領した、本当は私がムハンマドに一番近いのだから、当然、初代カリフになるところを、バクル、ウマル、ウスマーンに取られてしまった、けしからんというわけです。

アリーの奥様はムハンマドと先妻ハデージャの間にできたファティーマです。ところが、ムハンマドが晩年愛したのはアーイシャという絶世の美女で、その父が初代カリフになったアブー・バクルであります。先妻の娘と後妻の関係がうまくいくはずはありません。

その上、ムハンマドが生存中の話ですが、ムハンマドの妻アーイシャが戦争の際にムハンマドとはぐれてしまい砂漠で道に迷ったとき、砂漠で若い男に助けられました。この若い男と二人だけで砂漠で一夜を過ごし、不倫の関係に

陥ったということを、アリーが言いふらすものですから、アーイシャが激怒したということもあって、アリーとアーイシャとの関係は非常に険悪になったわけです。

どこの世界でも同じですが、女の戦いというのは陰惨であり、しかも目に見えないところで歴史を変えますが、今言ったようなことを理解しておかないと、イスラームの歴史は恐らく正しく理解できないだろうと思います。

アリーの長男ハサンは毒殺されます。殺したのはもちろんウマイヤの連中です。次男のフサインはウマイヤの軍人に騙し討ちに遭い殺されました。そのときにフサインの家族は男に皆殺しされ、女は鎖につながれて恐らく奴隷として売られたのでしょう。とにかく、アリー及び二人の息子は卑劣な手段で非業の最期を遂げました。フサインの殺害が、史上有名なカルバラの大虐殺であります。

しかし血縁関係から言えば、アリーはムハンマドに一番近いわけで、これをアリーの党派――アラビア語でシーアというのは一味とか党派という意味――と言います。

三、シーア派及びスンニー派

シーア派成立の事情

シーア派とは何かということは、今お話しましたとおりですが、初代から三代までのカリフをシーア派は全面的に否認します。特に初代のカリフはムハンマドの後妻の父親になりますから、認めるわけにいきません。シーア派においてはアリー及び彼の子孫だけがムハンマドの正統な後継者であるということになります。

そういうわけで、シーア派の人はカリフという言葉を使いません。カリフはシーア派以外の者に取られ、四代以後はカリフはウマイヤ家とかアッパース家からたくさん出てきますので、シーアはカリフというふうに言わないで、「霊的指導者」という言葉を使います。イマームというのがムハンマドの血を引いている、つまり直系の霊的な指導

者というわけであります。アリーが初代のイマームであります。二代目が長男のハサン、三代目が次男のフサインで、以後十二代まで続きます。十二代目のイマームはどこかへ行ったきり帰って来ないけれども、今でも生きているという話です。どこかで今なお生きているというのは、何か弘法大師みたいですね。

いずれにしましても、シーア派の考え方というのは、今申し上げたようなことで、ムハンマド家の血のつながりを非常に重視して、あくまでもムハンマドの後継者である、ムハンマドの教えを身をもって伝え広めるのがシーア派であるということです。アリーの直系以外の者はイスラームの後継者ではあり得ないということです。これがシーア派と言われている人々の基本的な考えではないかと思います。

ただ、実際問題としてシーア派というのは数からいったら少ないのです。イスラーム教徒の中で恐らく一〇％いるかいないか、七・五ないし八％くらいではないかと思います。イラクの場合には、スンニーよりもシーアのほうが多いと言われております。イラクの場合はシーア派が六〇％、クリスチャンが三％、スンニー（スンナ）が三〇％ということです。シーアがイラクの国教になっています。

シーアは四人の正統なカリフを認めません。アリーのみがカリフである、いや、イマームであり、その子孫のみが認知されるべきであります。特にアリーの次男フサインの殺された日を記念祭として、その無念さをかみしめ、虐殺を思い出すというのがシーア派において重要な行事なのです。

スンニー派とは何か

シーア派の考え方をもう一度整理しますと、ムハンマドの最高の権威はアリー及びアリーの後継者であるイマームのみに伝えられる。したがって、ムハンマドの後継者のみがクルアーン（コーラン）の正しい解釈を行うことができるということになります。

これに対しまして、スンニー（スンナ）というのがあります。イスラーム世界におきましては九〇％ぐらいがスン

ニー派であって、それは大変大きな力を持っております。

スンニーというのは、四人の正当に選ばれたカリフをムハンマドの正統な後継者として認めるというものです。ですから、一応、アリーも正統なカリフの中に入っています。したがって、アブー・バクルから始まって、ウマル、ウスマーン、そしてアリーに至るまでの四人の初期のカリフはすべて正統だということは認知されるわけです。

なぜ、スンニーと言うかといえば、もともとはスンナという言葉があって、これは預言者ムハンマドのスンナ、つまり、ムハンマドの言行、慣例を意味します。ムハンマドのスンニーに従おうではないかというのがスンニー派の基本的な立場であります。スンニー派は大変冷静かつ知的ではないかと思います。

シーア派の場合は非常に感情的です。彼らはムハンマドの血を重視します。血脈ということでしょうか。これに対しまして、スンニーのほうは、あくまでもムハンマドの言行、慣例に照らしてイスラーム教徒の行動を判断しようではないかということになっております。

イスラーム法における四つの法源

スンニー派には四つの学派があります。学派の名前は省略しますが、四つの学派は法律です。イスラーム特にスンナーというのは理性的、理知的で、物事をすべて法的に解決しようとします。イスラーム法ということが当然そこで問題になってきます。

スンナーの基本的よりどころは、シャリーア（イスラーム法）といって四つあります。彼らはシャリーアを基準にして物事を決めます。ムハンマドの後継者である霊的指導者の言うことがすべて正しいというのではなくて、四つの基準をつくって、その基準によって事柄を判断しようというわけです。

まず第一の基準は、クルアーン（コーラン）です。クルアーンに書かれていることは正しい。

第二の基準は、スンナです。預言者ムハンマドの言行、慣例は重んじられなければいけない。

第三の基準は、イジュマー（共同体の合意）です。イスラームという運命共同体（ウンマ）の人は合意を重んじなければならない。

第四の基準は、キャース（類推）です。例えば、クルアーンに書かれてないこと、それからムハンマドが言わなかったり行ったりしなかったこと、スンナにもないことが日常生活において起こった場合、学識者すなわち法律学者（ウラマー）、宗教界の指導者あるいはクルアーンを読誦する人々の合意によって、恐らくクルアーンではこのように解釈されるだろう、もしムハンマドが生きていたらこのように言っただろうと類推されるのであります。

これを人はイスラームの四つの法源と言っていますが、スンニー派はこのような形で物事を決めていこうと努力いたします。これがスンナもしくはスンニー学派の考え方の基本なのです。

これをもっと簡単に申しますと、預言者ムハンマドは死んでこの世にいませんから、その代理であるカリフが、独断ではなくて、今申したような四つの法源によって事物を合理的に決定すべきだというのがスンニー派の基本的な考え方です。

新聞を読んでいると、シーアが良くてスンニーが悪いような印象を受けますが、どうしてどうして多数だから悪いということはないのであります。スンナの考え方はかなり合理的であって、共同体の合意ということは私たちにとっても大事なことではないかと思います。

四、イスラームの基本

イスラームの基本は、シーアもスンニーも共通です。それは五柱と六信です。五柱というのはアラビア語にはありません。それはイスラームの五つの柱という意味で用いられています。六信という語の原語はイマーンと言います。イマーンは信仰という意味です。

五柱

五柱とは、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼の五つですが、信仰告白が一グループ、それから礼拝から巡礼まではイバーダー（勤行）と言って、一グループになります。

①信仰告白

信仰告白の完全な文句は、実はクルアーンにはありません。別々にはありますが、まとまった形ではありません。信仰告白とは、アラビア語でシャハーダと言い、「アッラーのほかに神が存在しないことを私は証言します」というのが第一の部分、「ムハンマドは神の使徒であることを私は証言します」というのが第二の部分であります。この二つを一組にして、これを音吐朗々と朗読するのがシャハーダです。

ユダヤ教の場合はヤハゥェ（エホバ、天地創造神、唯一最高神）という言葉は神聖な言葉ですから、この言葉を口にすることを人は嫌がります。恐れ多く畏み申すということです。ところが、イスラームの場合は音吐朗々と大きな声で発声するところに特長があります。これは非常に重要なことではないかと思います。

「アッラーのほかに神なし」ということは、アラビア語で「タウヒード」と言います。神は一つであるということです。すなわち、多神教（シルク）の禁止です。他の神々をアッラーの仲間にしてはいけない。アッラーのみが神であるということを認めるのが重要です。

「ムハンマドは神の使徒である」という信仰告白は、「アッラーのほかに神なし」という信仰告白と一対をなしております。ムハンマドは神ではなくて、生身の人間だということが中心的なのです。このことを言ったのは、ムハンマドの親友であったアブー・バクルです。ムハンマドが死んだとき、人々は「ムハンマドは帰ってくる」とか、「天に昇って神になった」と言いましたが、アブー・バクルはムハンマドの葬式のときに「バカなことを言うな。ムハンマドは人間なんだ。死んでしまったから、彼はもう帰ってこない」と大きな声で言いました。

クルアーンの第三章の百四十四に「ムハンマドは一人の使者にすぎない。使徒たちは彼の前に逝った。もしも彼が死ぬか、または殺されたら、あなた方は踵（きびす）を返すのか」とあります。ほかの人々はアブー・バクルのこの言葉を聞いて愕然としたということです。

要するに、ムハンマドは神の使徒であるということです。キリスト教ですと、イエス・キリストは神になります。しかし、ムハンマドは神になりませんし、ユダヤ教のモーセは約束の地に入ることを嫌い、ただ一人そこから引き返して山の中に入って、人知れず死んでしまいます。モーセが約束の地に入った場合、エジプトから四十数年かけて連れてきたイスラエル人から神としてあがめられますから、彼はそれを嫌いました。「自分は不完全な人間である」ということを、モーセはこのような形で認めたのですね。彼のお墓さえどこにあるか、いまだにわかりません。

ムハンマドの死後アブー・バクルというすばらしい人が生き残ったということは、イスラームの歴史において決定的でした。

「アッラーのほかに神なし。ムハンマドは神の使徒である」というのがイスラームの信仰告白です。イスラームの宗教は、実はこの信仰告白に尽きます。あとは何もないのです。イスラームは単純な宗教です。

②礼　拝

礼拝はサラートと申します。一日五回礼拝しなければいけません。私はトインビーの研究をしていて、日本語の翻訳を読んでびっくりしました。トインビーが「ファイヴ・タイムズ・イン・ア・デェイ」と書いてあるのを、日本のある大学の教授が、何を間違ったか「一日五時間」礼拝すると翻訳していて驚きました。礼拝するのは一日五回です。メッカのほうを向いて一日五回礼拝しなければいけない。

夜明けから日の出までが最初です。

二回目は、正午から早目の午後。

三回目は、二回目が終わってから、日没まで。
四回目は、日没からたそがれまで。
五回目は、日が暮れてから夜明けまでの間。
この場合、大事なことはクルアーンを大きな声で音吐朗々と読み上げることなのです。特に先ほど申しました信仰告白のくだりは、クルアーンにはありませんが、信者はこの文句を唱え、すべての人の上に平安があること、そして神の慈悲があることを願わなければいけないのです。

③喜　捨

ザカートと言います。これはキリスト教のチャリティとは違います。考え方が違うわけです。残っているもの、不要なものを人に与えるのがザカートではありません。
イスラーム教徒はムスリムですから神に服従します。したがって、財産は神に属します。財産は自分のものではないのです。自分から今のような物質的な生活に恵まれていることを、人は神に対して感謝しなければいけないということが一つ。もう一つは、困っている人、苦しんでいる人、弱い人を助ける義務を人は有するということです。ムハンマドは天涯の孤児でした。だから彼は、孤児、未亡人など経済的弱者に対して熱い涙を注いだのです。ですから、喜捨というのは、困っている人を救済するための税金であるということです。
イスラーム教徒は原則として二・五％納めます。これは所得に対してではなくて、財産に対する二・五％ですから、相当きついものではないかと思います。

④断　食

ムハンマドがヒラー山で神の啓示を聞いたのが、ラマザーン（断食の月）であったと言われています。これは、イスラーム暦で第九箇月目に当たります。

断食というのは、日中は飲み物、食べ物を一切口にしてはいけないし、セックスもしてはいけない。健康な人は必ず断食をしなければいけないが、小さな子供とか病人、妊産婦、激しい労働をしている人、旅行中の人は断食をしなくてもよろしいという規定があります。

この断食はイスラーム暦で一カ月続きます。断食の意味はいろいろありますが、一つだけ申し上げますと、人間はひもじい思いをしないと、ひもじい人の苦しみはわからないというのが、断食をする理由の一つであると思います。そういった意味で、ムハンマドが断食の月をつくったことは大変すばらしいことではないかと思います。

⑤巡　礼

アラビア語で巡礼を意味する語はハッジです。ムスリムは生涯に一度メッカに旅をしてほしいということでしょうか。信者はメッカに行き、カーバ神殿で祈りを捧げなければいけないということです。

クルアーンの第三章九十七に、

「この家（注―カーバ）への巡礼は、そこに赴ける人々に課せられたアッラーへの義務である」

と記されております。

巡礼をして、アブラハム、イシュマエル、そしてムハンマドの足跡をしのんでみようではないかということであります。

六　信

これはイスラームの六つの信仰です。

①アッラー

イスラーム教徒は、まずアッラー（神）を信じなければいけない。

②預言者

預言者はたくさんおります。イエスもモーセもアブラハムも預言者ですが、一番最後の預言者はムハンマドです。ムハンマドは預言者の「印章」であると言われています。ムハンマドだけでなくて、ほかの預言者をもイスラーム教徒は信仰しなければならないというわけであります。

ムハンマドはキリストに対してもかなり敬意を払っています。ただし、ムハンマドによれば、イエス・キリストは神ではなくて人間です。そこがイスラームとキリスト教が決定的に違うところでありましょう。

③天　使

天使が存在することを認めようというのがイスラームです。この点、イスラームはユダヤ教及びキリスト教とそれほど違いませんね。

イスラームの代表的な天使は、ガブリエル（ジブリール）、ミカエル（ミーカール）、イスラフィルス、アズラヘルトです。

神の命令を我々に伝える、目に見えない天使という名の感覚を超えた存在を認めなければならないというわけです。

④啓　典

クルアーンのことです。クルアーンは神が人間に遣わした神の言葉であります。それはムハンマドの記録ではなく、神の記録ということになります。

⑤来　世

初期ユダヤ教と全く違うところです。初期ユダヤ教の場合には、来世はございません。この世しかないのです。ところが、イスラームの場合には来世（アーヒラ）を認めなければいけないというのです。

なぜ来世を認めるかということは、キリスト教と深くかかわります。要するに、それは死者の復活を前提にしています。

来世の問題は、宗教者にとって大変難しい、そして深刻な問題を提起します。

⑥予　定

これについてはいろいろ意見が分かれ一口では言えませんが、少なくとも初期のイスラームの場合には、あらゆる存在の運命は全知全能の神によってあらかじめ定められています。このことは、クルアーンを読む限り、ほぼ言えるかと思います。ただ、イスラーム神学においては予定説は必ずしもそう簡単にならない問題を含んでおります。

五、イスラームの神秘主義

時間を超過しましたので、一言しか申し上げられませんが、イスラームの宗教は一口で申しますと、立法の宗教です。何しろ物事すべてを法律（シャリーア）によって決めていこうというのがイスラームです。これではちょっと息苦しくなりますし、かた苦しいから、もうちょっと情緒的な面とでも申しますか、個人的体験を重んじようではないかということが言われるようになり、そこで登場するのが神秘主義です。

ただ、神秘主義を突き詰めますと、どうしてもスンナー派とかシーア派の基本的利害と衝突します。クルアーンを読んでいる限り、アッラーは天地創造者であり、しかも裁判官です。人間は最後の審判においてアッラーの裁きを受けねばなりません。要するに、神と人間の関係は創造者と被造者の関係です。ところが、神秘主義になりますと、恋愛感情と同じで、私とあなたということになりますと、アッラーと人間は溶けて一つになります。神秘主義においては創造者と被造者の区別は消滅してしまい、天国とか地獄とか言っても、「地獄へでもどこへでも私は喜んで行きましょう」、「天国なんて必要ありません」ということになりますから、どうしたってうまくいきません。神秘主義者の中心テーマは「信仰」ではなく「愛」（mahabbah）なのです。そこで、神秘主義はイスラームの基本的な利害と衝突をすることになります。

正統的なイスラームの信仰と正面衝突したのがハラージュです。「我れは真理である」と彼は言ったのです。これを別の言葉で言うと、「私は神である」ということです。「私は真理である」と言って非難されなかったのはイエスですが、ハラージュがそういうことを言ったものですから、彼は八五八年に処刑されました。

とはいっても、宗教というのは体験です。体験のない宗教は宗教ではないと思いますが、神秘的な体験をイスラームの正統的な教義と何とか統合しようという企てが行われます。そのような統合を行ったのがムハンマドの次に偉いと言われているガザーリー（一〇五八～一一一一）です。ガザーリーのおかげでスーフィー主義はイスラームの「心臓の鼓動」として認知されるようになりました。

結論にかえて

もっともっとお話したいのですが、時間が参りましたので結論を一、二申し上げておきます。

イスラームの宗教を眺めていて私の感じた点は、次のとおりです。

神は一つである、ムハンマドは神の遣わした使者であるというのはすばらしい思想でありますが、ムハンマドが神によって啓示された教えの中心は何かというと、それは最後の審判であり、そして死者の復活であるという考えは問題です。

神を信仰する者は、復活の日に救われてパラダイスに赴く。しかし、神に対して信仰薄き人、あるいは信仰を持たない人は地獄に落ちて、いつまでも苦しめられる。そういう報復の思想はユダヤ教には全くないのですが、イスラーム及びキリスト教は、基本的にこの点で合致します。この問題をどうするかということが一つの大問題です。

もう一つは、イスラームの持っているすばらしさは生活共同体の観念です。今、生きている人間の福祉を、現実にこの地上で何とかして改善しようという具体的な方策がイスラームには存在します。それは法律です。そういうとこ

ろは高く評価されるべきではないかと思います。

時間の関係で中途半端になりましたが、以上で私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

※本稿は、平成三年三月十三日に現宗研主催で行った現代宗教研究セミナーにて講演されたものを筆録したものです。